

## 有り難き日常

松田妙子



前回の「『私』と『仏』の間には」を書き上げた翌日、山に登りました。前日の雨は上がって、夕日が射していましたが、私はもう日射しを憎いとは思いませんでした。晴れがあるから雨が有り難いのだと、素直に思えました。薄紫色の名も知れぬ野草が沢山花をつけていました。地面をちろちろと水が流れ、丈の高い草の影が映っていました。——ああ、浄土のようだ、と思いました。「私」は「仏」にはなれない。でも「私」の中に「仏」はあるのだと気づいた時、私の居る所がすなわち浄土になるのだろうか、と、そんなことを思うくらい、私の精神は高揚していました。

でも、雨がやんだ瞬間から乾燥が始まるように、一瞬澄んだ心もすぐ濁ります。ゴキブリとは闘わなくちゃならないし、家の前に放置された犬のフンを、ムカつきながら始末しなきゃならないし、依存は増すばかりで身体に悪いことやめられないし。生きていくってことはそうした雑事に煩わされることの連続であって、つまり心にとっては、煩ったり悩んだりしているのが「普通の状態」なのです。煩惱こそが日常。

夏の日照りに七転八倒した挙句、ようやく雨らしい雨が降って狂喜し、「私」という字の中に「仏」という字が隠れていることを発見したのが、私にとって1つの頂点でした。今はちよつと脱力気

味。それで今回は、煩惱の日常の中から心に浮かんだ断片を、書きとめることにします。たまにはこういうのもいいよね？

昔、仏壇の前でお経を上げていた母に、「それ意味がわかって読んでのん？」と訊いたことがあります。母は「全然分からんけど、お寺さんにこれを読めと言われたから」と答えました。私は内心見下して、「私はそこまで馬鹿じゃない」とばかりに、岩波文庫の教典の現代語訳を買いこんで、得意になっていました。どっちが馬鹿だったか！

前回、中島みゆきの歌を引用しましたが、あれには続きがあるのです。「この世を見据えて笑うほど、冷たい悟りもまだ持てず、この世を望んで走るほど、心の荷物は軽くない」の続きは、「救われない魂は、傷ついた自分のことじゃなく救われたい魂は、傷つけ返そうとしている自分だ」。でも浄土真宗について少しずつ学ばせて頂いている今の私なら、そういう魂こそが救われるのだ、と思いますね。この歌の題名は「友情」。いかにも、かつてのみゆきさんらしいへそまがりぶり。

若い頃は年をとるのを恐れて、自分より年下の人とばかり接していました。でも「若い」といわれるのは、自分より年上の人達に囲まれている時なんです。それに気づいた時には、私はもうあんまり若くなかった・・・トホホ。

九四才の絵の老師から、また作品展の案内が届きました。師のお年を考えると、一度たりとも見逃してはならぬと思ひ、作品展には必ず足を運んで、感想を書いた葉書を出すことにしています。こういうやりとりができることの有り難さ。

「ボクに残された時間はもう少ないから」が老師の口癖。それ

は、私に残された時間も少ないということです。長い間眠っていた私の、美術に対する感性が充分に目覚めるまで、先生待っててくださいね。先生が表現しようとしてくれるものを、私が充分に感じ取れるようになるまで。

中島みゆきの歌には、嫌いなものも多いけど、深く共感で

きる歌も多いです。「誕生」という歌は、二番目の歌詞がいい。「友情」と題してあんな歌を作る彼女は、「誕生」と題して死をも見つめています。「帰りたい場所が、また一つずつ消えてゆく／＼すがりたいたい誰かを失うたびに、誰かを守りたい私になるの」——これ、わかる！この感じがわかるようになったというところが、年をとるっていうことなんだなあ……。

風邪気味だというのに、例の運動依存で木枯らしの中ジョギングして汗をかき、本格的に風邪を引きこんでしまいました。寝ようとすると鼻がつまって、「わっ、息ができない！」と慌てました。「このまま窒息して死んでしまうかも」とあせり、人はこんな簡単なことでも死ぬのだな、と思いました。たかが風邪、たかが鼻づまり。でも、呼吸ができて生きていられることの有り難さを、思い知らされた一瞬でした。

熱が出て来たみたい。寝ても起きても、何をしても楽にならないので、こんなしんどい時間が速く私の上を通り過ぎますように、と願っています。自分の周囲のものが浄土に見えるほどの時間もあったというのに。どんな思いでいようと、過ぎていく時間は同じなのに。風邪を引くというのも一種の非日常。煩惱だらけの日常も、やはり「有り難い」ことだったんですね。

## 仏事ひとくちメモ 火葬・還骨 東本願寺「真宗会館」冊子より

火葬場に着きますと、順次焼香をし、荼毘(だび)(火葬)にふします。火葬にかかる時間は、約一時間です。この間、控え室で待つことになります。控え室では、お互いに故人を偲ぶとともに、通夜などのときにお話しいただいた住職の法話(浄土真宗の話)を思いおこし、深く味わうことも大切なことです。

火葬が終わりますと、遺骨をひろい、壺に納めます。遺族は、身近な人の生身の姿からお骨になるまでの姿を、短時間のうちに目の当たりにすることになります。このような姿に接しますと、いよいよ人間の空しさ・はかなさが実感されることでしょう。

「……朝(あした)には紅顔ありて夕べには白骨となる身なり。……野外におくりて夜半のけぶりとなしはてぬれば、ただ白骨のみぞのこれり。……人間のはかなき事は、老少不定(ふじょう)のさかいなれば、たれの人もはやく後生の一大事を心にかけて、阿弥陀仏をふかくたのみまいらせて、念仏もうすべきなり」

これは、蓮如上人の「白骨の御文(おふみ)」の一節です。私たち人間は、朝には元気な姿であっても、夕には白骨となる身を生きています。老人も若者も区別なく、誰もが同じ無常の身を生きています。いつ死を迎えるかわからない身だからこそ、何はさておいてもただ今の人生に心を向けて、南無阿弥陀仏を真の依り所に生きなければなりません。

蓮如上人が語る「念仏もうす」人とは、無量の寿(いのち)に目覚めて生きる人です。それは、悔いのない確かな人生を知った人です。

さて、遺骨と共に自宅に戻りますと、お内仏(ないぶつ)(お仏壇)の近くに壇を設けて遺骨を安置して、お勤めをします。このお勤めを「還骨勤行(かんこつごんぎょう)」といいます。この勤行のおり、今の『白骨の御文』が拝読されます。心静かに拝聴したいものです。きつと、蓮如上人の語りかけが亡き人の問いかけと重なって聞こえるに違いありません。

お内仏がない場合のお飾り等については、住職にお尋ねされるとよいでしょう。

